

Ⅲ

教員の教育観・指導力と日常生活

第6章 教員の児童・生徒・保護者に対する考えや指導観

- 第1節 児童・生徒の変化
- 第2節 保護者の変化
- 第3節 指導観

第7章 指導力に関する取り組み

- 第1節 力を入れて研究している教科・領域
- 第2節 教科・領域の指導の得意・苦手
- 第3節 教員の指導力に対する評価（校長）
- 第4節 教員の指導力を高める取り組み（校長）
- 第5節 指導力を高める取り組み（教員）
- 第6節 職場や教員間の関係

第8章 教員生活の実態と意識

- 第1節 小学校教員の日常生活
- 第2節 中学校教員の日常生活
- 第3節 教職の魅力
- 第4節 教員の悩み
- 第5節 教員生活への満足度
- 第6節 将来展望

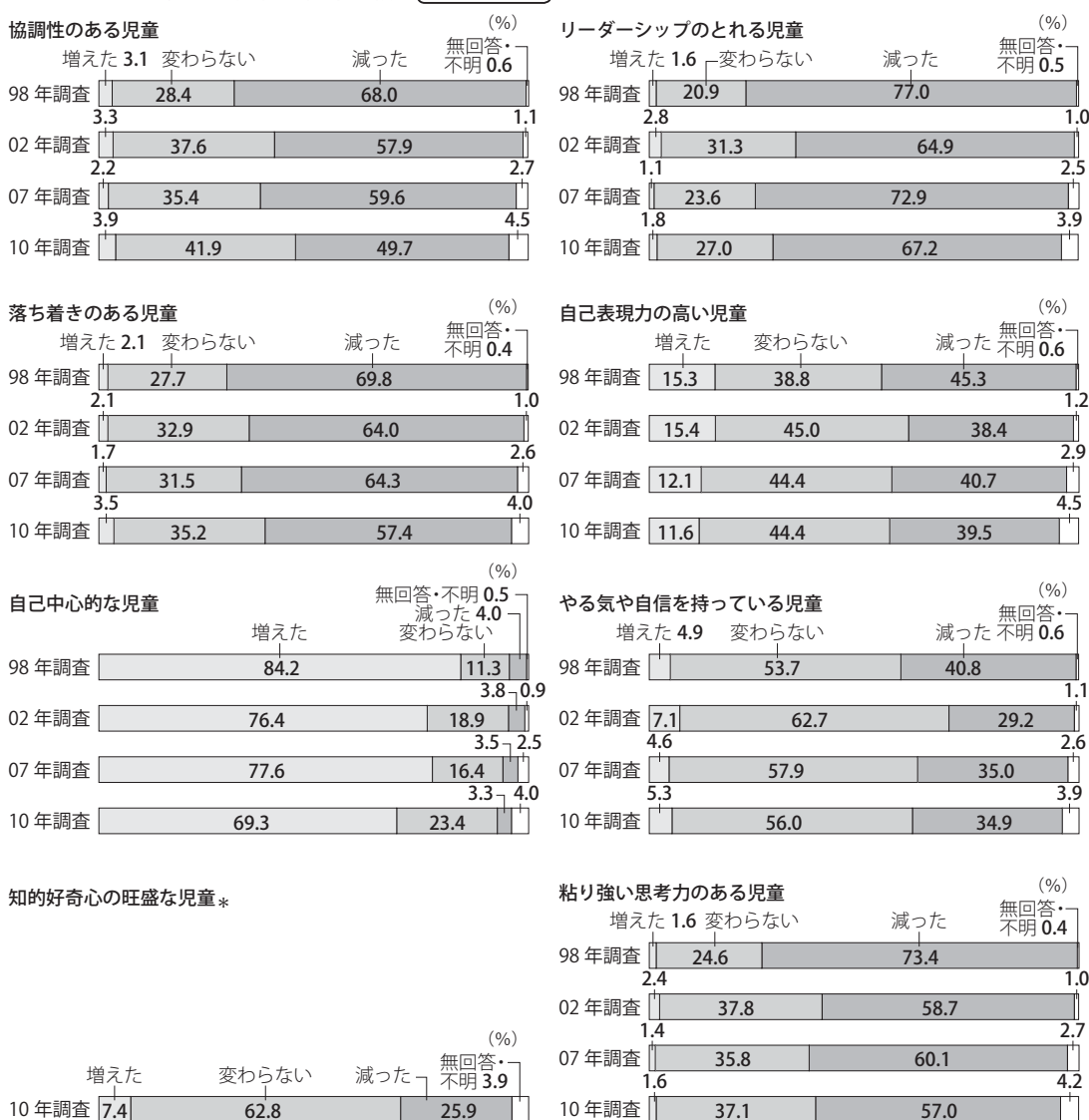
第6章

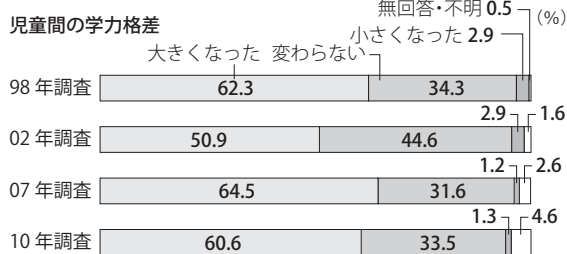
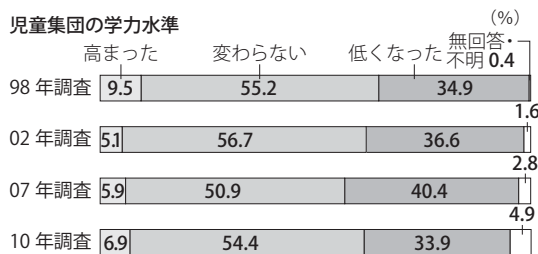
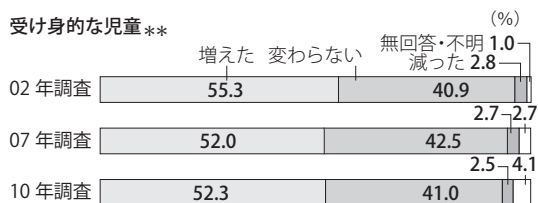
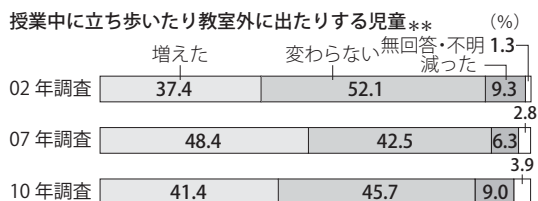
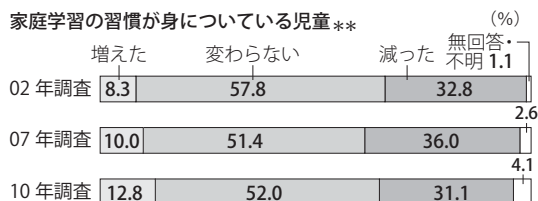
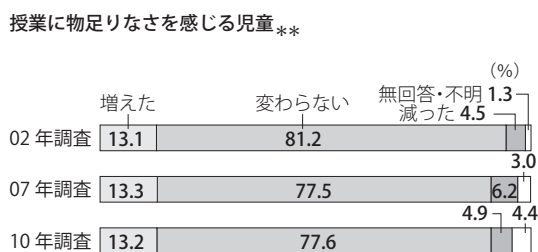
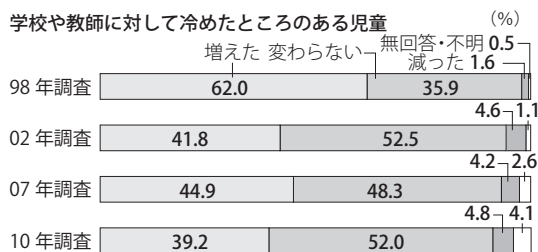
教員の児童・生徒・保護者に対する
考えや指導観

第1節 児童・生徒の変化

児童・生徒間の学力格差が「大きくなった」と回答した教員は、小・中学校ともに6割を超えており、その傾向は07年調査から変わらない。一方、児童・生徒集団の学力水準について「低くなった」と回答した教員は、小学校で3割、中学校で4割台で、07年調査に比べて、「低くなった」の回答比率は減少している。

図6-1-1 児童の変化（経年比較） **小学校教員**





注1) *印は、10年調査より新たに追加した項目。**印は、98年調査でははずねていない。
注2) サンプル数は、98年調査1,033人、02年調査3,468人、07年調査1,872人、10年調査2,688人。

小学校や中学校の教員は児童や生徒がどのように変化してきていると感じているのだろうか。ここでは経年比較で、とくに変化の大きかった項目を中心に取り上げる。

まず、小学校教員は児童をどのようにとらえているのか、98年調査からの傾向をみたものが図6-1-1である。全体の傾向に大きな変化はないが、前回の07年調査からの変化をみると、「協調性のある児童」が「減った」と回答した教員は07年調査の59.6%から49.7%に減少している。また「自己中心的な児童」が「増えた」と回答した教員も07年調査の77.6%から69.3%に減少している。

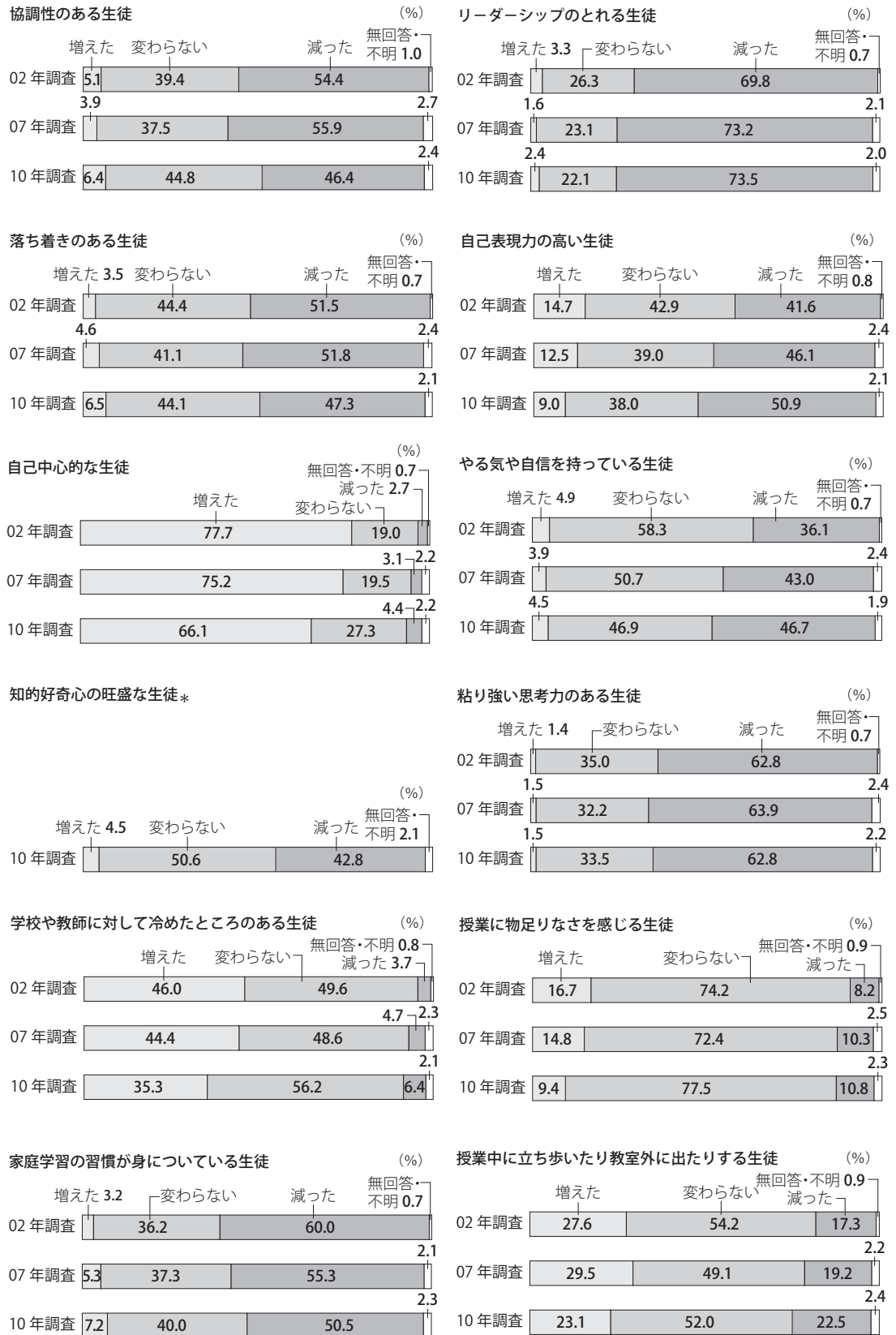
また「学校や教師に対して冷めたところのある児童」が「増えた」という回答も（07年調査44.9%→10年調査39.2%）、「授業中に立ち歩い

たり教室外に出たりする児童」（07年調査48.4%→10年調査41.4%）の2項目で5ポイント以上減少している。以上、これまでの回答傾向をみると、教員は今の児童を協調性があり落ち着いているが、少し大人しくなったと認識しているかもしれない。

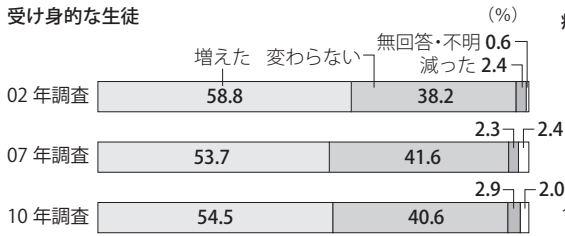
最後に児童集団の学力水準、学力格差についてであるが、学力水準について「低くなった」と回答した教員は、07年調査の40.4%から33.9%に減少している。教員の認識としては、少なくとも児童集団の学力水準が低下しているとはとらえていないようだ。一方、学力格差については07年調査からわずかに減少しているものの、依然6割の教員が「大きくなった」と回答している。

Ⅲ 教員の教育観・指導力と日常生活

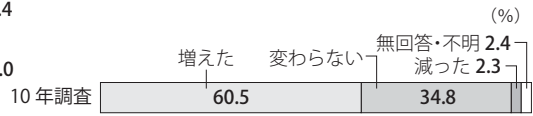
図6-1-2 生徒の変化（経年比較） **中学校教員**



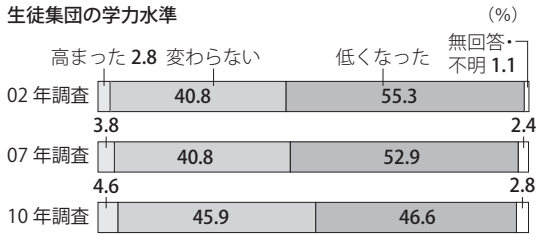
受け身的な生徒



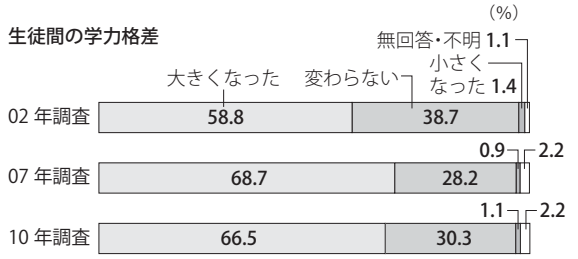
疲れている生徒*



生徒集団の学力水準



生徒間の学力格差



注1) *印は、10年調査より新たに追加した項目。

注2) サンプル数は、02年調査は2,891人、07年調査2,109人、10年調査2,827人。

つづいて、中学校教員の生徒の変化についての回答をみてみよう(図6-1-2)。「協調性のある生徒」について「減った」と回答した教員は、07年調査の55.9%から46.4%に減少している。また「学校や教師に対して冷めたところのある生徒」が「増えた」と回答した教員は、07年調査の44.4%から35.3%に減少している。さらに「自己中心的な生徒」(07年調査75.2%→10年調査66.1%)、「授業中に立ち歩いたり教室外に出たりする生徒」(07年調査29.5%→10年調査23.1%)が「増えた」の回答も減少しており、小学校教員の回答とほぼ同じ傾向がみられる。その他、「自己表現力の高い生徒」が「減った」と認識している教員が増加している一方で、「家庭学習の習慣が身につけている生徒」が「減った」と認識している教員が減少しているという変化もみられる。

以上の回答傾向をみると、中学校教員はこれまでの生徒と比べ、協調性や落ち着き、学習面ではおおむね肯定的な認識をもっているようである。しかしながら一方で、「自己表現力の高

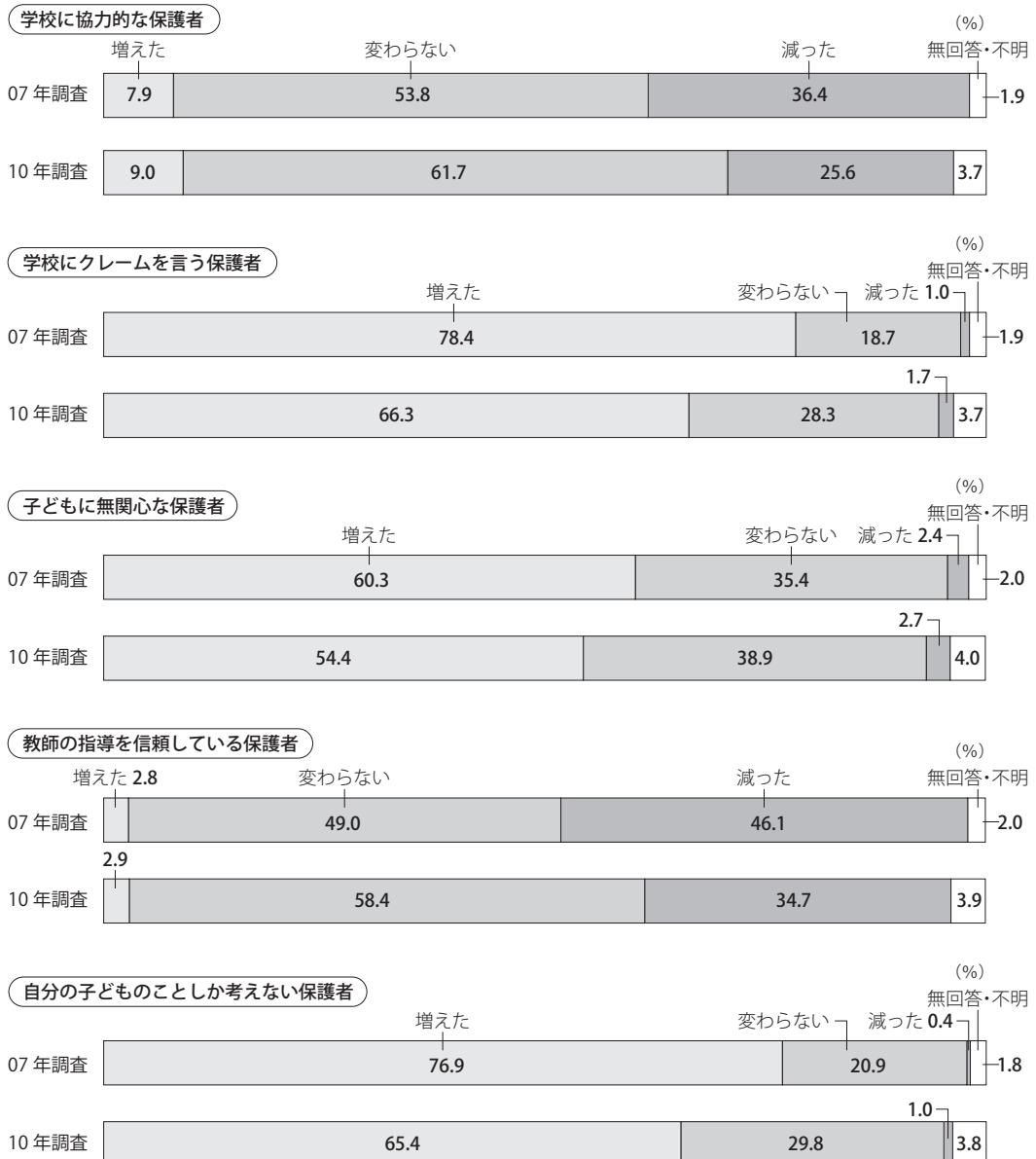
い生徒」や「やる気や自信を持っている生徒」といった項目では「減った」と回答する教員が年々増加している。生徒が消極的になってきているという認識をもった教員が増えている可能性がある。

最後に生徒の学力に関する教員の回答をみてみよう。「生徒集団の学力水準」が「低くなった」と回答している教員は、07年調査の52.9%から46.6%に減少しており、学力水準が低下したと認識している教員は減少している。一方、「生徒間の学力格差」が「大きくなった」と回答している教員は6割を超えているものの、07年調査から変わっていない。学力水準自体は低下しておらず、むしろ改善傾向がみられることを考慮すると、手厚い指導による学力水準の向上や底上げを、教員自身も徐々に感じ始めているのではないかと考えられる。ただ、学力格差が「大きくなった」の回答は、変わらず高い比率で維持されているため、勉強のできる子とできない子の差が今まで以上に広がっていると感じているのかもしれない。

第2節 保護者の変化

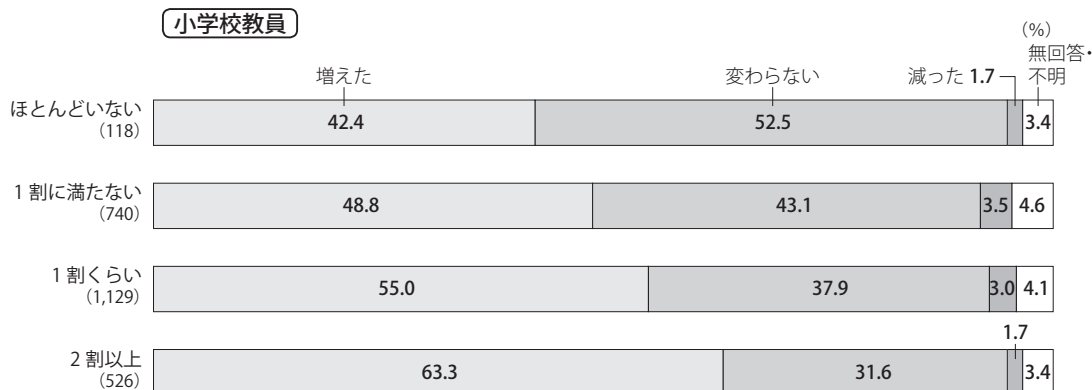
保護者の変化では、小・中学校の教員ともに「学校にクレームを言う保護者」「自分の子どものごときしか考えない保護者」が「増えた」と回答した教員が6割台。ただし07年調査と比べるとそれぞれ10ポイント以上減少している。一方、「学校に協力的な保護者」「教師の指導を信頼している保護者」が「減った」と回答した教員は07年調査から減少。

図6-2-1 保護者の変化（経年比較） **小学校教員**



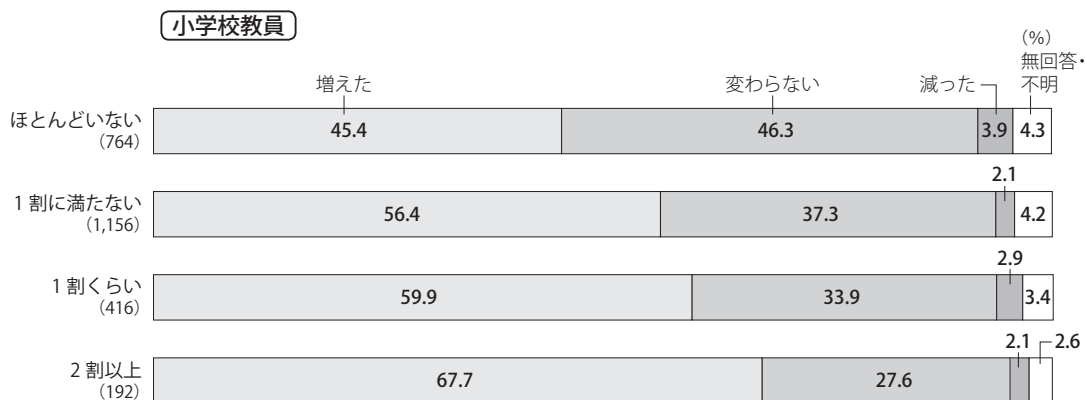
注) サンプル数は、07年調査1,872人、10年調査2,688人。

図6-2-2 子どもに無関心な保護者（学習指導に困難を感じる児童の比率別／10年調査）



注) () 内はサンプル数。

図6-2-3 子どもに無関心な保護者（生活面のケアが十分に受けられていない児童の比率別／10年調査）



注1) 校長に、学校に「学習指導に困難を感じる児童」「生活面のケアが十分に受けられていない児童」がどれくらいいるかをたずねた設問に対する「ほとんどいない」「1割に満たない」「1割くらい」「2割以上」「2割くらい」+「3～4割くらい」+「5割以上」の回答別に、保護者の様子「子どもに無関心な保護者」の変化をみている。

注2) () 内はサンプル数。

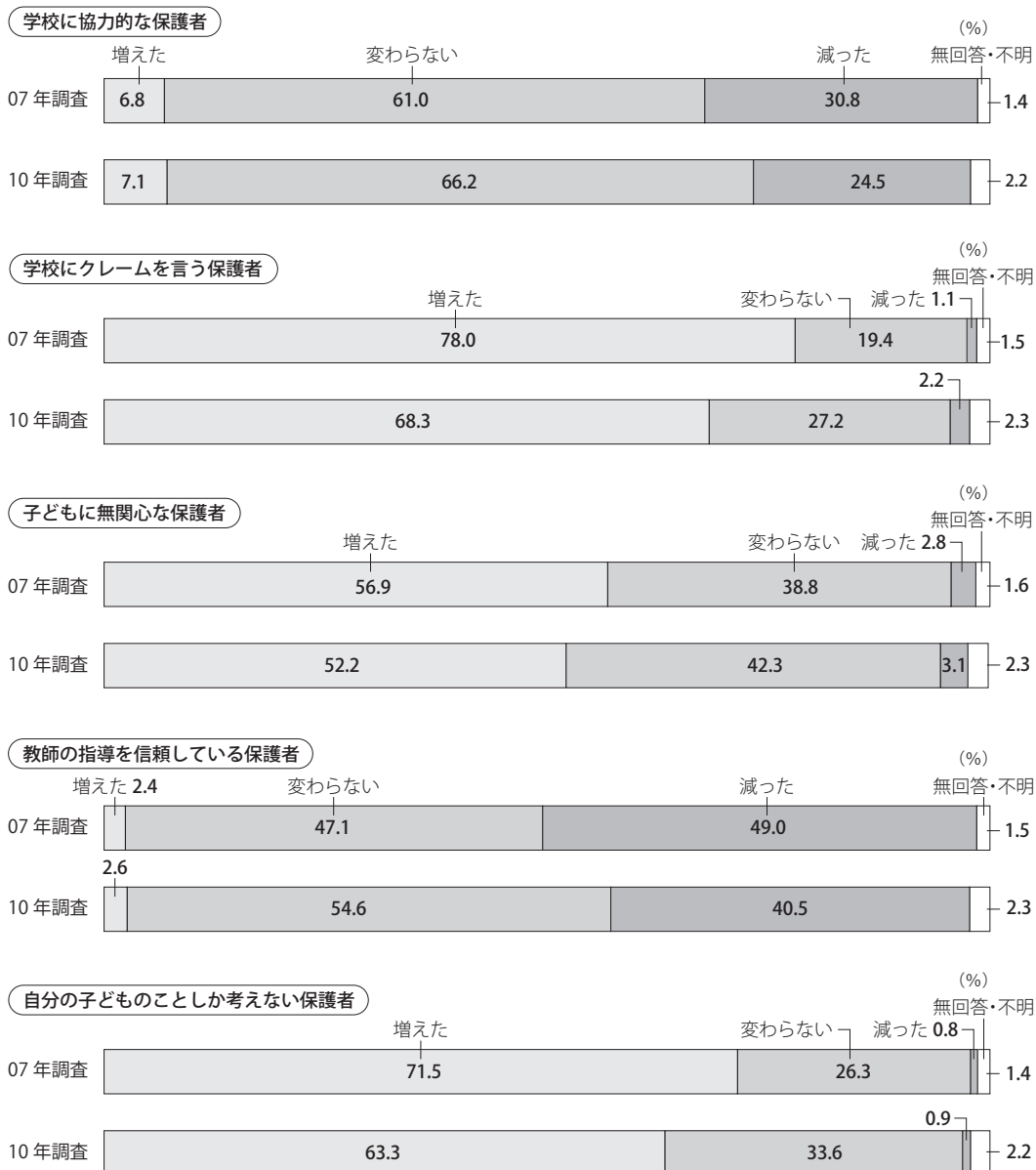
前節では、児童・生徒に対する教員の認識をみたが、保護者に対しては、教員はどのような認識をもっているのでしょうか。本節では、小学校教員の保護者に対する認識をみてみよう(図6-2-1)。「学校にクレームを言う保護者」「子どもに無関心な保護者」「自分の子どものことしか考えない保護者」の項目について、「増えた」と回答した教員の比率は、07年調査から減少している。一方、「学校に協力的な保護者」「教師の指導を信頼している保護者」の項目については、「増えた」の回答に変化はないものの、「減った」と回答した教員が減少している。しかしながら学校と保護者の関係は、地域によって、また、学校に対する保護者の期待やかわり方は大きく異なる。そこで「子ど

もに無関心な保護者」の項目を取り上げ、学校の特徴ごとに教員の保護者に対する認識をみた(図6-2-2・3)。

学習指導に困難を感じる児童や生活面のケアが十分でない児童の比率が高い学校の教員ほど、子どもに無関心な保護者が「増えた」と感じる教員の比率が高くなっている。教員の勤務する学校によって、児童や保護者の特徴に異なりがみられる。またここでは図表は省略するが、家庭の経済状況が困難な家庭が多い学校ほど、子どもに無関心な保護者が「増えた」の比率が高い。児童の学習や生活を改善していくためには、教員だけでなく、児童を取り巻く保護者や自治体の協力が必要だといえる。

Ⅲ 教員の教育観・指導力と日常生活

図6-2-4 保護者の変化（経年比較） **中学校教員**

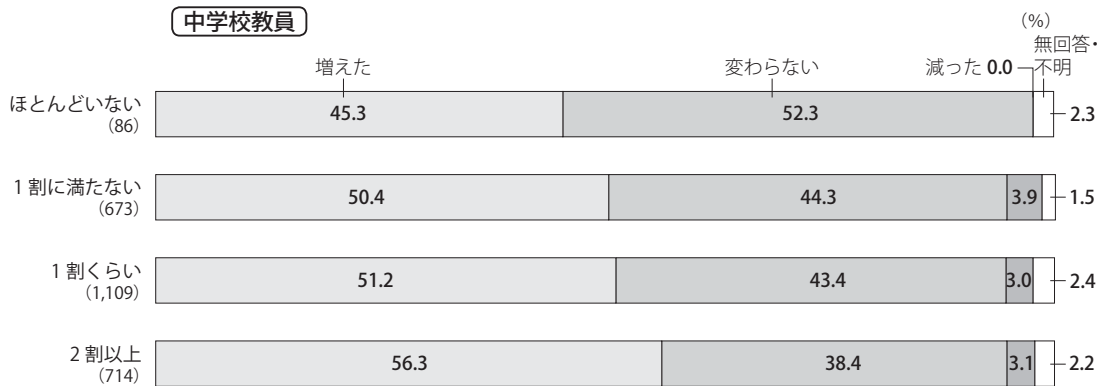


注) サンプル数は、07年調査2,109人、10年調査2,827人。

つづいて中学校教員の保護者に対する認識をみてみよう(図6-2-4)。全体的には、小学校教員とほぼ同様の傾向がみられた。「子どもに無関心な保護者」について回答の傾向に変化はみられないものの、「学校にクレームを言う保護者」「自分の子どものことしか考えない保護者」の比率は07年調査から減少している。

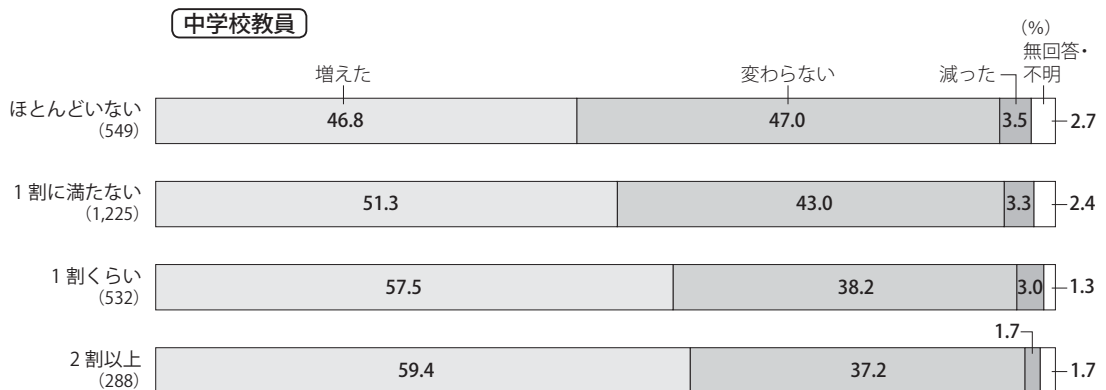
「学校に協力的な保護者」「教師の指導を信頼している保護者」の項目も、小学校教員と同様、「増えた」の回答に変化はみられないが、「減った」の回答は減少しており、中学校教員の間でも、保護者を肯定的にとらえている教員が増加しているようにみえる。

図6-2-5 子どもに無関心な保護者（学習指導に困難を感じる生徒の比率別／10年調査）



注) () 内はサンプル数。

図6-2-6 子どもに無関心な保護者（生活面のケアが十分に受けられていない生徒の比率別／10年調査）



注1) 校長に、学校に「学習指導に困難を感じる生徒」「生活面のケアが十分に受けられていない生徒」がどれくらいいるかをたずねた設問に対する「ほとんどいない」「1割に満たない」「1割くらい」「2割以上」（「2割くらい」+「3～4割くらい」+「5割以上」）の回答別に、保護者の様子「子どもに無関心な保護者」の変化をみている。

注2) () 内はサンプル数。

さらに中学校教員に対しても、学校や学校に来ている生徒の特徴ごとに、教員の「子どもに無関心な保護者」の認識をみた(図6-2-5・6)。

中学校教員も、小学校教員と同様、学習指導に困難を感じる生徒や生活面のケアが十分に受けられていない生徒の比率が高いほど、子どもに無関心な保護者が「増えた」と回答する教員の比率が高くなる傾向がみられた。生徒に対する学習指導や生活面のケアを行っていくためには、学校や教員だけでなく、保護者や行政も含めた生徒の学習、さらには生活を支えていく環

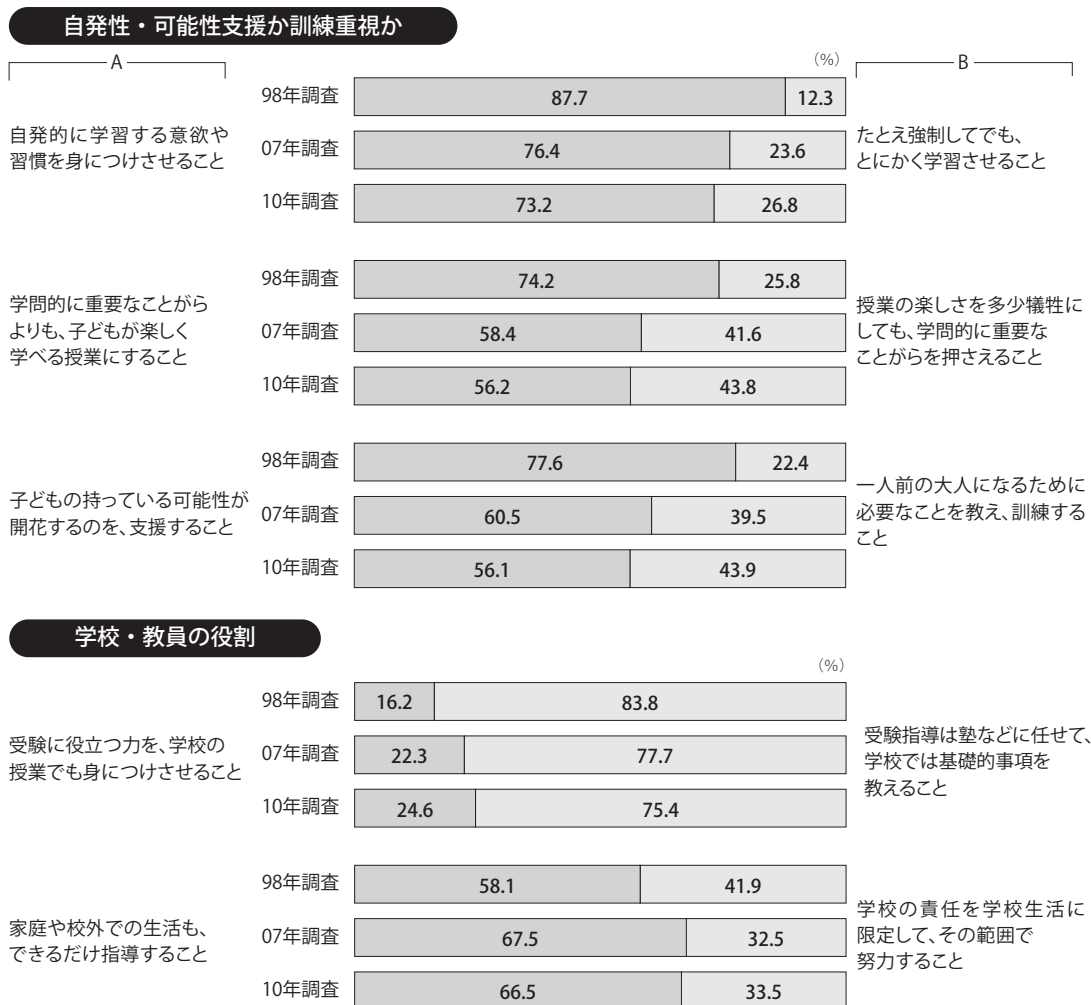
境を整備していく必要があるだろう。

ここまで、小・中学校教員の保護者に対する認識について説明してきたが、ここで取り上げた教員の「増えた」「変わらない」「減った」という選択肢は、あくまで教員それぞれの認識をたずねたものであり、回答した教員によって判断の時間軸には異なりがある。また「学校にクレームを言う保護者」が「増えた」と回答した教員が7割いても、それは「学校にクレームを言う保護者」が7割いることを意味しているわけではない。以上の点に留意した上で、これらの結果を解釈していく必要があるだろう。

第3節 指導観

小・中学校の教員ともに、「子どもの持っている可能性が開花するのを、支援すること」よりも「一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること」を重視する傾向が年々強まっている。一方、「どの子どもにも、できるだけ学力をつけさせること」「客観的な基準を使って、子どもを公平に評価すること」を重視する傾向は07年調査から変わらない。全体的に、07年調査からの変化は小さく、今回の調査結果は98年調査から07年調査の変化の延長線上にあるといえる。

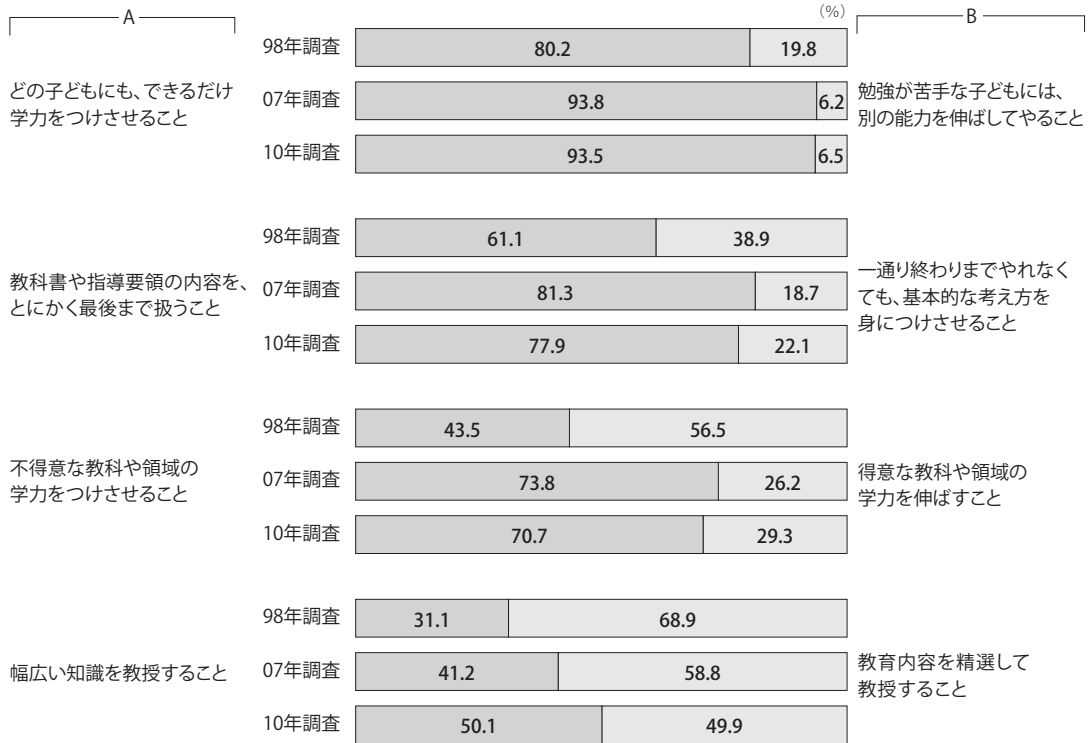
図6-3-1 指導観（経年比較）**小学校教員**



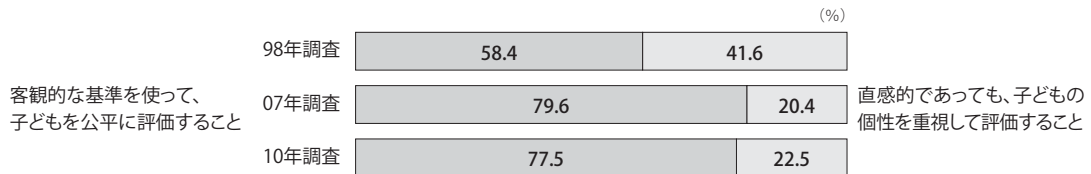
次に教員がどのような指導観をもっているか、またそれが経年でどう変化しているのかみてみよう。小学校教員の指導観の変化を経年で見たとところ（図6-3-1）、「たとえ強制して

でも、とにかく学習させること」（98年調査12.3%→07年調査23.6%→10年調査26.8%）、「一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること」（98年調査22.4%→07年調査

育てる力と教育内容



評価方法



注1) 数値は、無回答・不明を除いて算出している。

注2) サンプル数は、98年調査1,033人、07年調査1,872人、10年調査2,688人。

39.5%→10年調査43.9%)をより重視する傾向が強まっており、以前よりも訓練志向になっている。ただし、07年調査から10年調査の変化自体は大きいものではなく、今回の結果は、98年調査から07年調査の変化の延長線上にあるといえる。

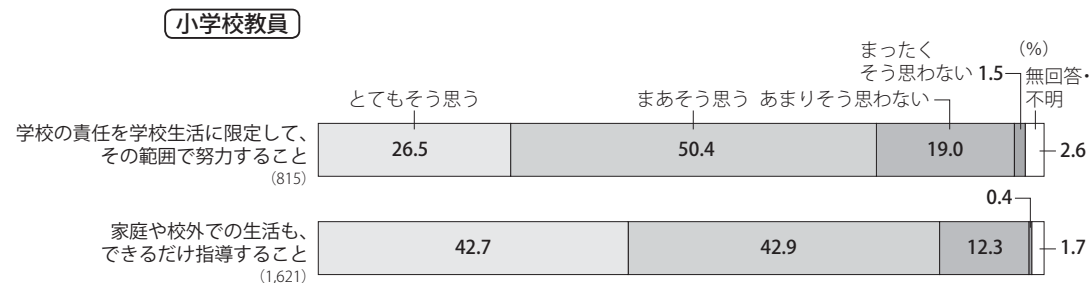
その他に変化が大きかった項目としては「幅広い知識を教授すること」(98年調査31.1%→07年調査41.2%→10年調査50.1%)がある。新学習指導要領への移行に向けた学習内容の増加が、数値の変化として表れているのかもしれ

ない。

一方で、「どの子どもにも、できるだけ学力をつけさせること」「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと」「客観的な基準を使って、子どもを公平に評価すること」「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」を重視する傾向は、98年調査から07年調査にかけて大きな変化がみられたものの、07年調査から10年調査ではほぼ変化していない。

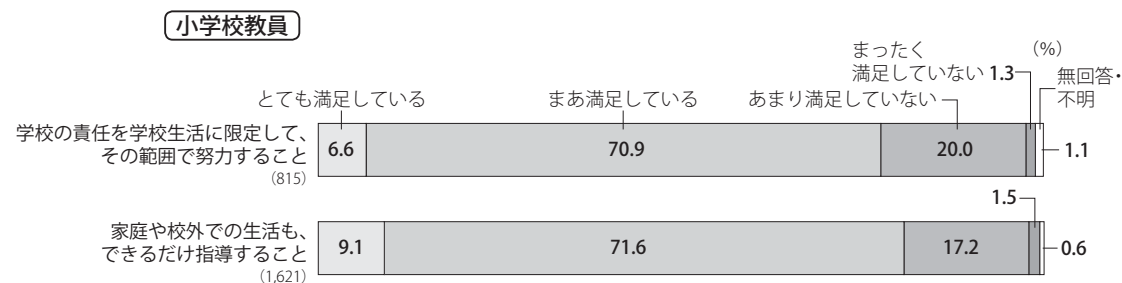
Ⅲ 教員の教育観・指導力と日常生活

図6-3-2 教職の魅力「将来にわたって子どもの成長にかかわれる」（指導観別／10年調査）



注) () 内はサンプル数。

図6-3-3 満足度「ご自身の教員生活に、どれくらい満足していますか」（指導観別／10年調査）



注) () 内はサンプル数。

では教員の指導観は教職の魅力や満足度にどのような影響を与えているのだろうか。その関係をみたものが図6-3-2・3である。

「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」を重視する教員ほど、「学校の責任を学校生活に限定して、その範囲で努力すること」を重視すると答える教員より「将来にわたって子どもの成長にかかわれる」ことに魅力とを感じる教員が多い。

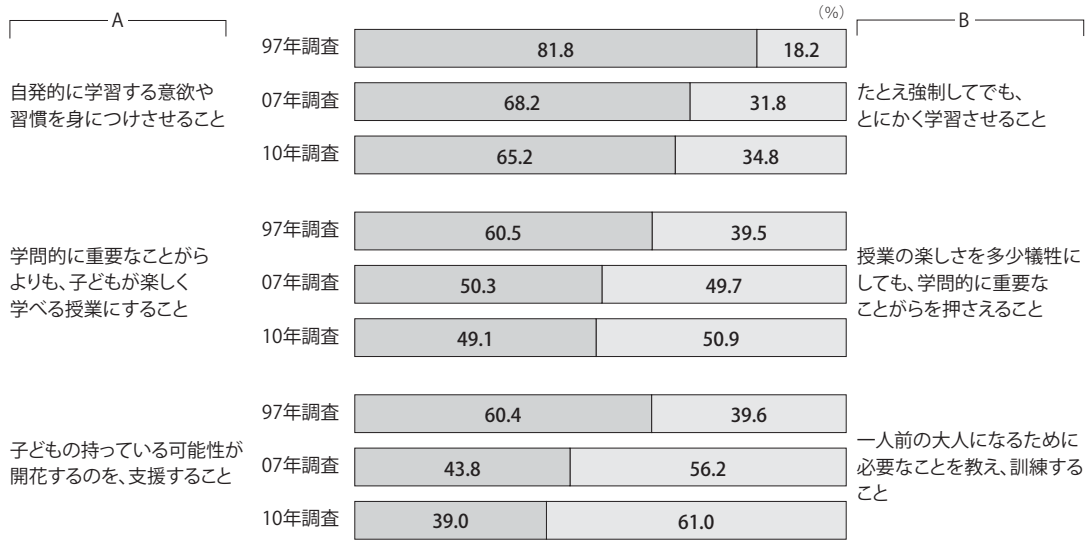
さらに指導観と教員生活の満足度の関係をみたところ、「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」を重視する教員ほど、「学校

の責任を学校生活に限定して、その範囲で努力すること」を重視すると答える教員より、満足度が高くなっている。

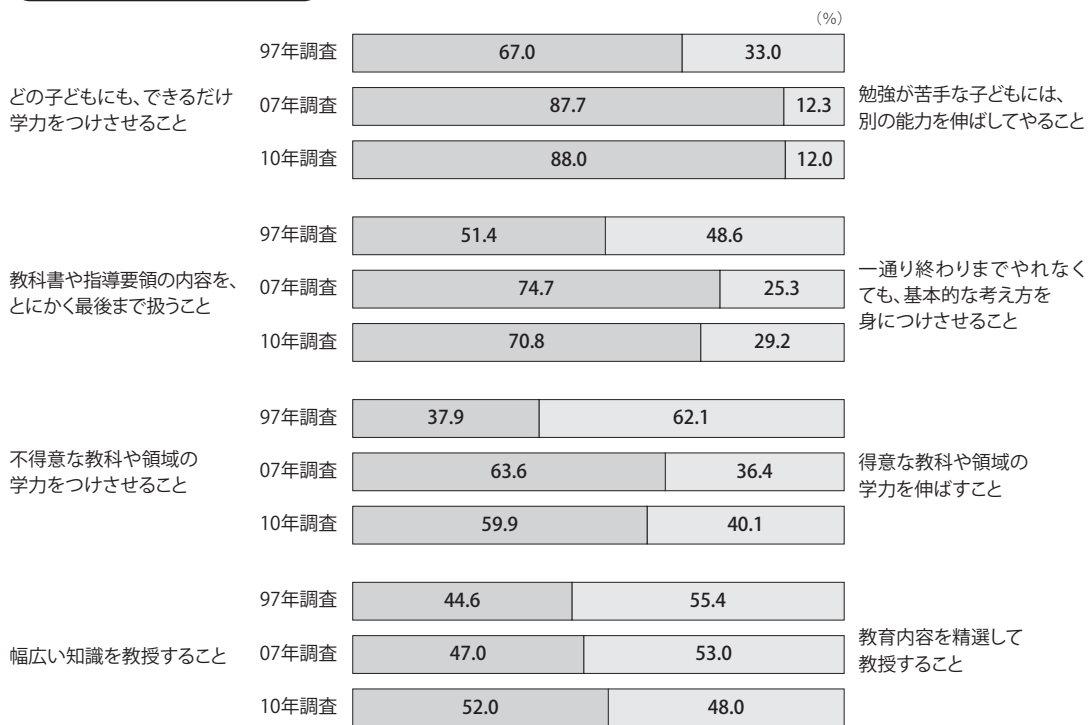
これらの結果は、「献身的な教師像」がいまもなお教師を支えていることを示すものだけでなく、そこでの献身性が、従来のように閉じられた学校内や学校生活に限定された範囲で発揮されるだけではなく、家庭や学校外の生活に対する姿勢とも結びついている可能性がうかがえる。

図6-3-4 指導観（経年比較） 中学校教員

自発性・可能性支援か訓練重視か



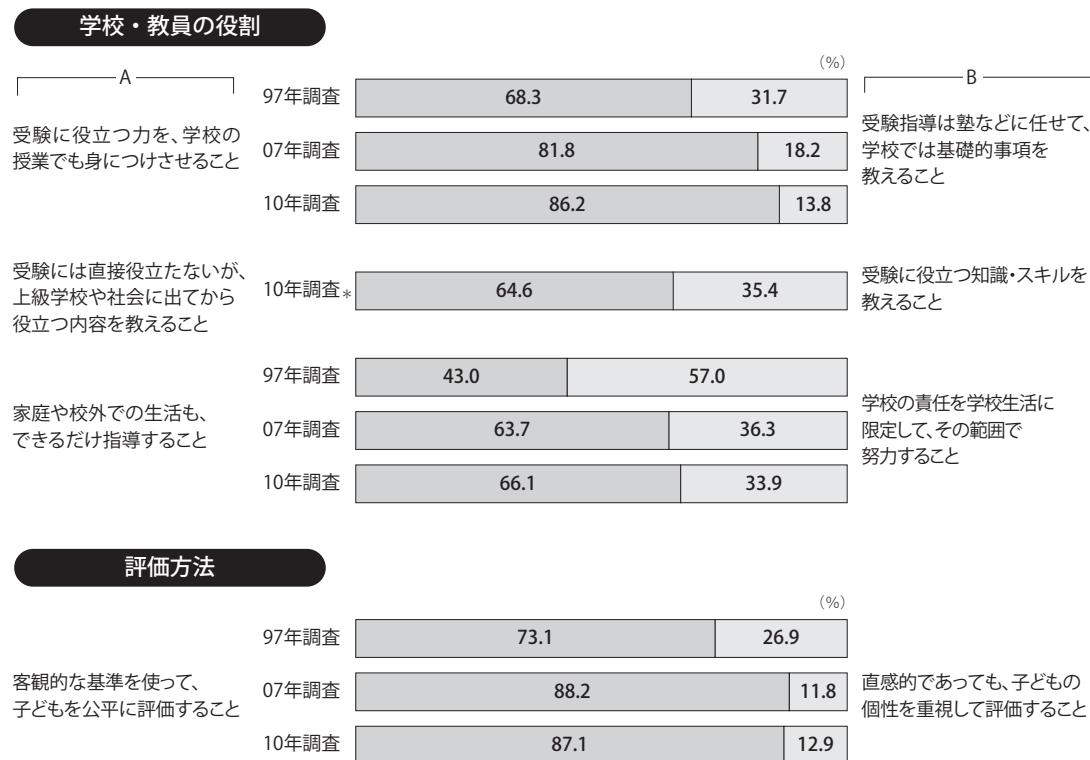
育てる力と教育内容



注1) 数値は、無回答・不明を除いて算出している。
 注2) サンプル数は、98年調査938人、07年調査2,109人、10年調査2,827人。

Ⅲ 教員の教育観・指導力と日常生活

図6-3-4 指導観（経年比較） **中学校教員**（つづき）



注1) 数値は、無回答・不明を除いて算出している。

注2) *印は、10年調査より新たに追加した項目。

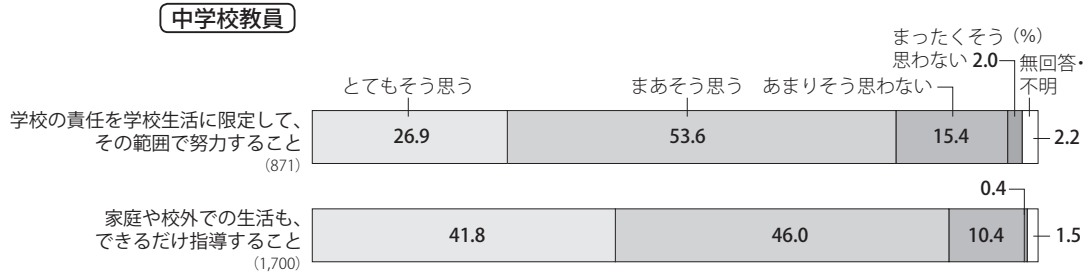
注3) サンプル数は、97年調査938人、07年調査2,109人、10年調査2,827人。

つづいて中学校教員の指導観をみてみよう(図6-3-4)。自発性・可能性の支援か訓練重視かの傾向を示す項目をみると、小学校教員と同様、中学校教員でも強制や訓練を重視する傾向が強まっており「たとえ強制してでも、とにかく学習させること」「一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること」のポイントが年々増加している。その一方で、「どの子どもにも、できるだけ学力をつけさせること」「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと」「客観的な基準を使って、子どもを公平に評価すること」を重視する傾向は07年調査から変わっていない。

中学校教員においても、小学校教員と同様、調査ごとに変化している指導観と比較的変化なく維持され続けている指導観があることがわかる。また小学校教員にはたずねていないが、中学校教員の受験に関する指導観にも変化がみられた。「受験に役立つ力を、学校の授業でも身につけさせること」が年々増加しており、97年調

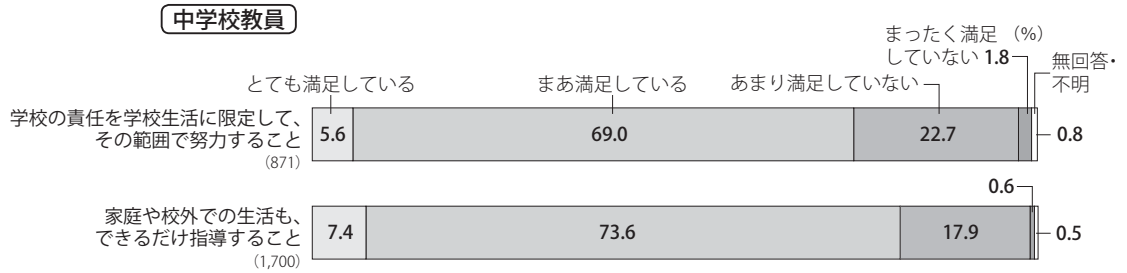
査では68.3%であったが、10年調査では86.2%の教員が重視すると回答しており、この10数年で17.9ポイントも増加している。しかしながら、「受験には直接役立たないが、上級学校や社会に出てから役立つ内容を教えること」か「受験に役立つ知識・スキルを教えること」のどちらを重視するかをたずねた項目では、「受験には直接役立たないが、上級学校や社会に出てから役立つ内容を教えること」を重視すると回答した教員が64.6%であり、受験のさらに先を見据えて日々の指導にあたっていることがわかる。また「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」を重視すると答えた教員が66.1%と約3人に2人にのぼり、教員が「学校の責任を学校生活に限定して、その範囲で努力すること」を重視すると答えた教員を大きく上回っている。教員の役割意識は学校内やその生活にとどまらず、学校の枠を超えてさらに拡大しつつあるといえる。

図6-3-5 教職の魅力「将来にわたって子どもの成長にかかわれる」(指導観別/10年調査)



注) () 内はサンプル数。

図6-3-6 満足度「ご自身の教員生活に、どれくらい満足していますか」(指導観別/10年調査)



注) () 内はサンプル数。

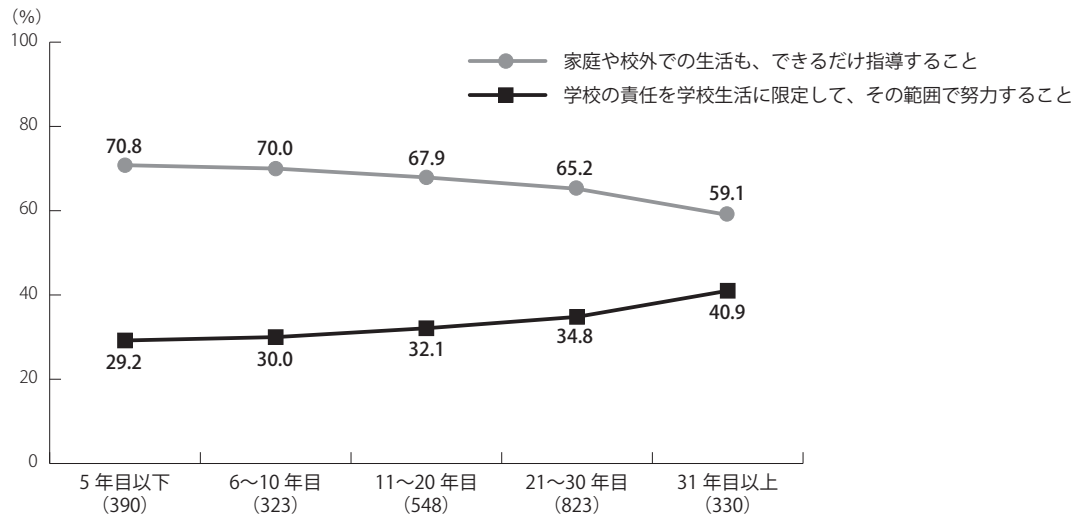
つづいて中学校教員の指導観別に教職の魅力と満足度についてみたところ(図6-3-5・6)、「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」を重視する教員ほど、「学校の責任を学校生活に限定して、その範囲で努力すること」を重視すると答える教員より「将来にわたって子どもの成長にかかわれる」ことに魅力と感じる教員が多い。また満足度との関係についても「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」を重視する教員ほど、「学校の責任を学校生

活に限定して、その範囲で努力すること」を重視すると答える教員より満足度が高くなっている。小学校教員と同様、中学校でも「献身的な教師像」がいまなお多くの教師を支えており、その献身性は、学校内や学校生活だけではなく、家庭や学校外の生活にも及んでいる。こうした小・中学校教員の「献身的な」姿勢によって、日本の学校教育が支えられ、また地域が支えられてきた部分は大きいのではないかと。

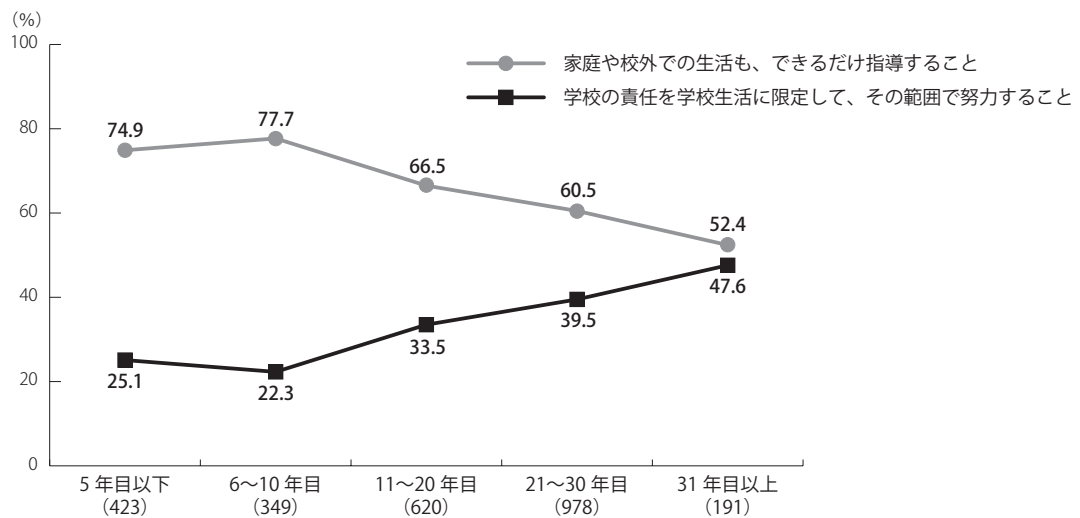
Ⅲ 教員の教育観・指導力と日常生活

図6-3-7 指導観（教職経験年数別／10年調査） 小学校教員 中学校教員

小学校教員



中学校教員



注1) 数値は無回答・不明を除いて算出している。

注2) ()内はサンプル数。

しかしこうした教員の「献身的な」姿勢ゆえに、周囲が教員の仕事に過剰な期待を抱いたり、あるいは教員自身が限定なく指導範囲を拡大してしまうことで、過剰な負担につながっていたりすることはないだろうか。教職経験年数別に指導観の変化をみると（図6-3-7）、とくに教

職年数が浅い若手の教員ほど「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」を重視する傾向が強く、教職経験年数を経るにつれて「学校の責任を学校生活に限定して、その範囲で努力すること」を重視する傾向が強まっている。